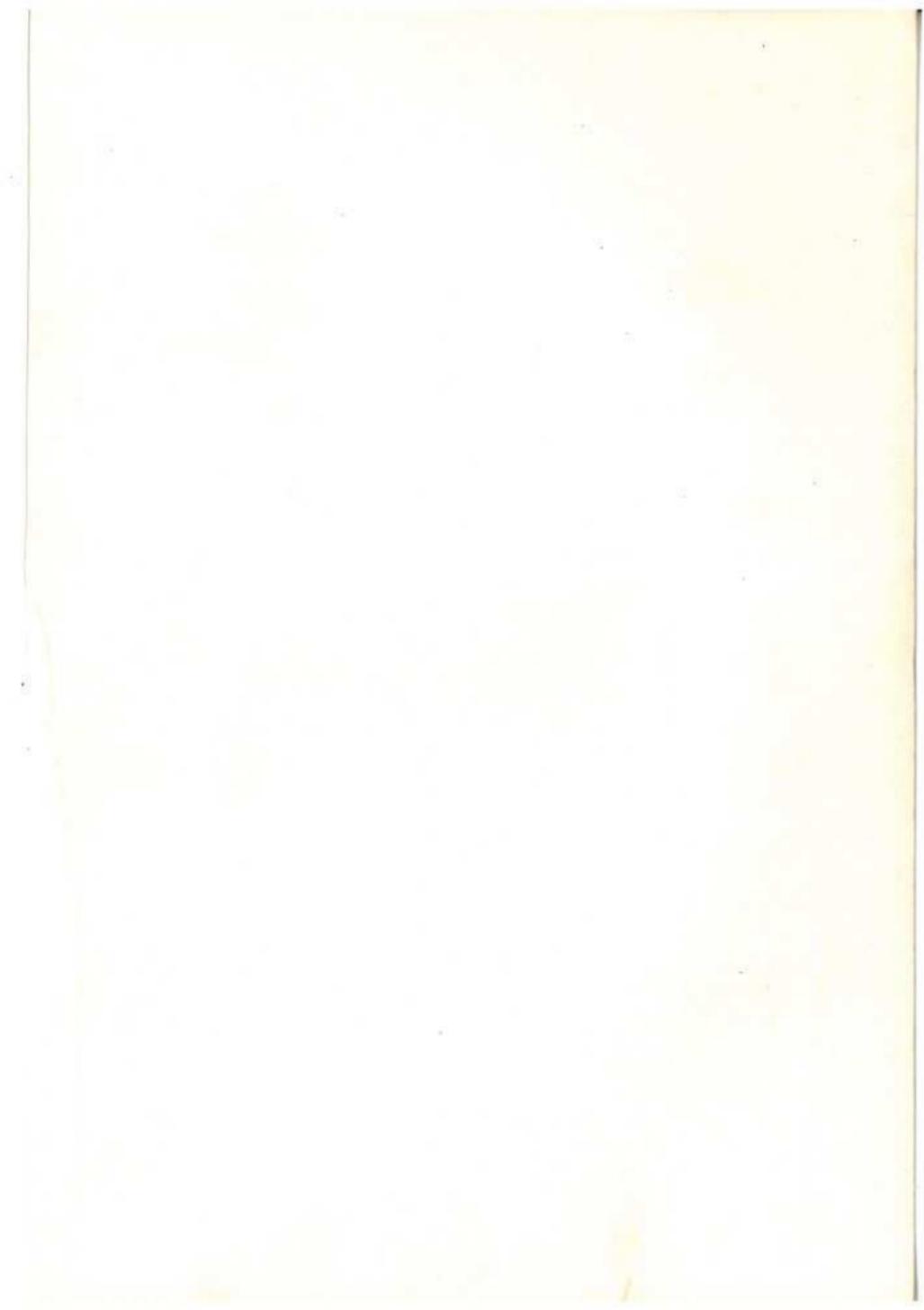


め だか いち
女 高 I 遺 跡

発掘調査概報

1996

掛川市教育委員会



め だか いち
女 高 I 遺 跡

発掘調査概報

1996

掛川市教育委員会

例 言

1. 本書は、平成7年7月10日から平成7年10月23日まで実施した静岡県掛川市高田字藤六1、902-1に所在する女高I遺跡の発掘調査概報である。
2. 調査は、女高I遺跡地内で計画された茶園改植に先立つ緊急の発掘調査で、国および静岡県の補助金を得て、掛川市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査では、土地所有者の宮崎貞雄氏をはじめ周辺土地所有者には、埋蔵文化財に対し多大なご理解とご協力を頂いた。宮崎貞雄氏には、発掘作業にも参加して頂いた。
4. 発掘調査は、掛川市教育委員会の松本一男の補助を得て、村松弘規が担当した。
5. 発掘調査ならびに整理作業には次の方々の参加を得た。
鈴木欣平・大庭虎雄・本郷公太郎・宮崎貞雄・榎原通伸・鈴木はつ子・鈴木辰江・長谷川幸子・松浦せい子・村松さと・宮崎充子・鈴木きん・豊田八重子・牧野すみ江・山崎まち・山崎すぎ・宮崎瑞恵・石亀まつ・松浦てつ子・大石トモ・上山英子・西田泰子・伊藤とよ・山崎美智子・井筒いつよ・仲林はな・岡本曉美・中村すま子・鈴木とし江・岡田あき江・松浦富美江・松浦まさ子・梅津まさあ・中山あさ・杉山まさ子・田辺洋子・竹村和紀・大川恵代・白石洋子
6. 本書の編集、執筆は掛川市教育委員会の戸塚和美の助言を得て村松が行った。
7. 発掘調査の業務は、掛川市教育委員会教育長小松弥生、社会教育課長清水功、文化係長澤村久雄のもとに社会教育課が所管した。
8. 調査によって得た資料は、すべて掛川市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 挿図における方位は、磁北を示す。
2. 本書で使用した遺構名称は次のとおりである。
SB：竪穴住居跡 SD：溝状遺構 SH：掘立柱建物 SP：小穴、ピット
SF：土壇 SX：意味不明遺構
3. 遺物実測番号は、写真図版と同一である。

目 次

例 言
凡 例

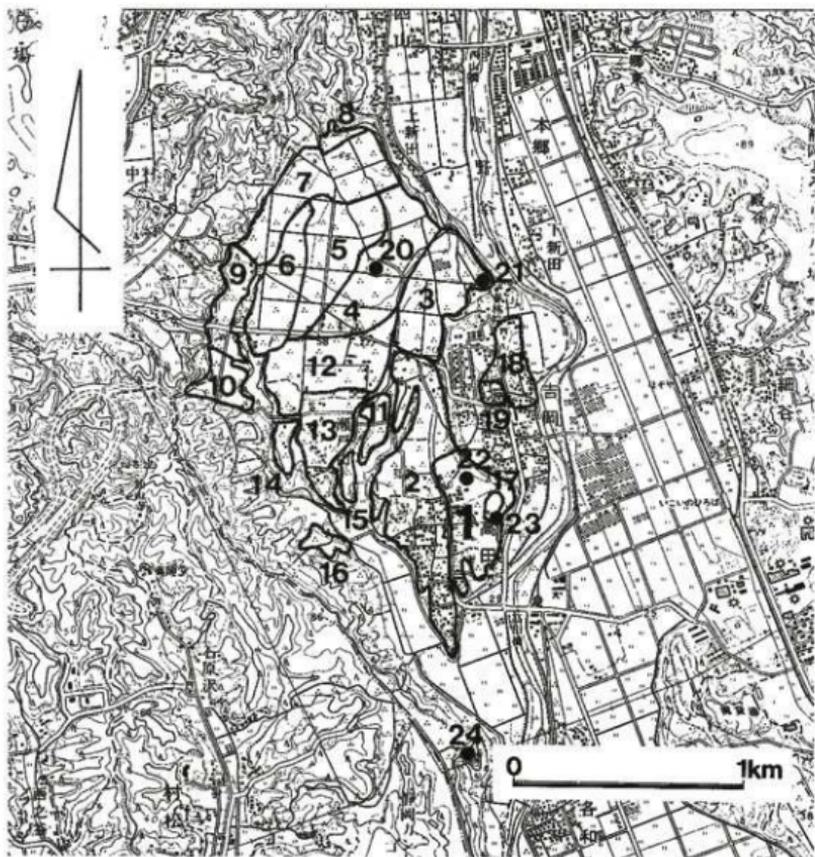
I	発掘調査と遺跡の概要	2
	1. 調査に至る経緯と調査の目的	
	2. 調査の方法と目的	
	3. 遺跡をめぐる環境	
II	調査の内容	6
	1. 遺構	
	2. 遺物	
III	まとめ	26

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置および周辺遺跡分布図	1
第2図	遺跡の周辺地形図	4
第3図	遺構全体図	7・8
第4図	S B01実測図	9
第5図	S B03実測図	10
第6図	S H01実測図	12
第7図	E・F・G-10・11区ビット実測図	13
第8図	S D02実測図	15・16
第9図	S D01・ビット列実測図	17
第10図	出土土器実測図(1)	19
第11図	出土土器実測図(2)	20
第12図	出土土器実測図(3)	21
第13図	出土土器実測図(4)	22
第14図	出土土器実測図(5)	23

図 版 目 次

- 図版Ⅰ (上)北調査区完掘状況
(下)南調査区完掘状況
- 図版Ⅱ (上)重機稼動風景
(下)S B01完掘状況(北から)
- 図版Ⅲ (上)S B03完掘状況(南から)
(下)S B03内S P04・05遺物出土状況(北から)
- 図版Ⅳ (上)S H01完掘状況(南から)
(下)S P20遺物出土状況(南から)
- 図版Ⅴ S D01・ビット列完掘状況(南西から)
- 図版Ⅵ E・F・G-10・11区ビット完掘状況(西から)
- 図版Ⅶ S D02遺物出土状況(西から)
- 図版Ⅷ S D02完掘状況(西から)
- 図版Ⅸ (上)S D02遺物出土状況微細(北から)
(下)S D02遺物出土状況微細(東から)
- 図版Ⅹ 出土土器1
- 図版Ⅺ 出土土器2
- 図版Ⅻ 出土土器3
- 図版Ⅼ 出土土器4



番号	遺跡名	時期	番号	遺跡名	時期
1	女高 I	弥生(中)～古墳(前)	13	瀬戸山 I	縄文(早・中)、弥生(後)～古墳(前)
2	女高 田	縄文(中)、弥生(後)～古墳(中)	14	瀬戸山 II	縄文(早・中・晩)、弥生(中・後)～古墳(前)
3	吉岡下ノ段	縄文(中・晩)、弥生(後)～古墳(後)、平安	15	瀬戸山 III	弥生(後)～古墳(前)
4	高田上ノ段	弥生(後)～古墳(中)	16	平田ケ谷	縄文(中)、弥生(後)～古墳(前)
5	大溝	縄文(中)	17	女高 II	縄文(晩)、弥生(後)～古墳(前)、奈良、平安
6	溝ノ口	縄文(中)、弥生(後)～古墳(前)	18	林	弥生(後)～古墳(前)、中世
7	東原	縄文(晩)、弥生(後)～古墳(前)	19	西塚古墳	古墳(中・後)～奈良
8	城ヶノ	弥生(後)～古墳(中)	20	大塚古墳	古墳(中)
9	腰坂	弥生(後)～古墳(前)	21	春林院古墳	古墳(中)
10	向原	縄文(中)	22	行人塚古墳	古墳(中)
11	大花	弥生(後)～古墳(前)	23	粟塚古墳	古墳(中)
12	吉岡	縄文(中・晩)、弥生(後)～古墳(前)	24	金塚古墳	古墳(中)

第1図 遺跡の位置および周辺遺跡分布図

I 発掘調査と遺跡の概要

1. 調査に至る経緯と調査の目的

女高I遺跡が所在する和田岡原は、縄文時代から古墳時代にかけての遺跡が集中している。とりわけ、古墳時代中期には春林院古墳・大塚古墳・瓢塚古墳・各和金塚古墳・行人塚古墳などから構成される和田岡古墳群として、当該地域でも有数の中期古墳群が造営される。

しかしながら、和田岡古墳群の周辺地域は、緑茶生産量日本一を誇る掛川市の茶栽培が盛んな地域で、茶樹改植に伴う「天地返し」が至る所で行われる。これは、地表土と地山土を重機等で転換する作業で、遺跡への被害は免れない。これまでに数多くの遺跡がそれによって消滅している。掛川市教育委員会では、こうした事態を避けるため、遺跡地内の茶園で茶樹改植が行われる際に、記録保存を目的とした発掘調査を実施している。

今回の調査は女高I遺跡地内に茶園を所有する宮崎貞雄氏より、改植を行いたいとの連絡を受け、掛川市教育委員会が平成5年10月27日に試掘調査を行った。その結果、弥生時代の遺物・遺構が確認されたため、国・県の補助金を得て掛川市教育委員会が発掘調査を実施することとなった。

2. 調査の方法と経過

発掘調査は、排土の場外処分ができなかったため、調査地を南北に半分ずつ分けて調査を行った。まず、重機により耕作土の除去を行った。続いて人力による掘削作業を行った。調査区は1辺5m四方の区画を任意に設定した。設定した区画の南北線は、 $N-3^{\circ}24'00''-E$ である。調査では、この区画に従い遺構の検出・遺物の取り上げ・図面作成等を行った。また、区画を設定した杭を国家座標に拾い出す基準点測量とベンチマークを設定するための水準点測量を業者に委託した。

現地での図面は、遺構全体図については20分の1縮尺、主たる遺構と遺物の出土状況の平面図等は10分の1縮尺で作成した。写真による記録は、ブローニーサイズ(6×7)原画白黒・35mmサイズ原画白黒・同リパーサル撮影によった。また、業者に委託して、ラジコンヘリコプターによる調査区全体の空中写真撮影を行った。

調査の経過は、以下のとおりである。

平成7年7月10日～7月12日	北半部の重機による耕作土の掘削。
7月11日～9月5日	人力による粗掘・遺構確認・遺構掘削・写真撮影・図面作成
9月6日～9月11日	完掘写真撮影・完掘遺構実測・ラジコンヘリコプターによる

空中写真撮影。

9月6日～9月29日

基準点測量および水準点測量。

9月11日～9月14日

重機による北半部の埋め戻し。南半部の耕作土の掘削。

9月13日～10月3日

人力による粗掘・遺構確認・遺構掘削・写真撮影・図面作成

10月4日～10月23日

完掘写真撮影・完掘遺構実測・ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影。発掘調査器材の片付け。

3. 遺跡をめぐる環境

女高I遺跡の所在する和田岡原は、東側を流れる原野谷川により形成された河岸段丘に占地する。この河岸段丘面をみると、大きく二つの段丘面に分かれていることがわかる。標高60m前後の上の段丘面を吉岡原、標高40～50mの下の段丘面を高田原と呼ばれており、小さな谷が複雑に入り込んでいる。今回調査した地点は、高田原の南縁辺部に近く、南側に小さな谷が入り込んでいる。

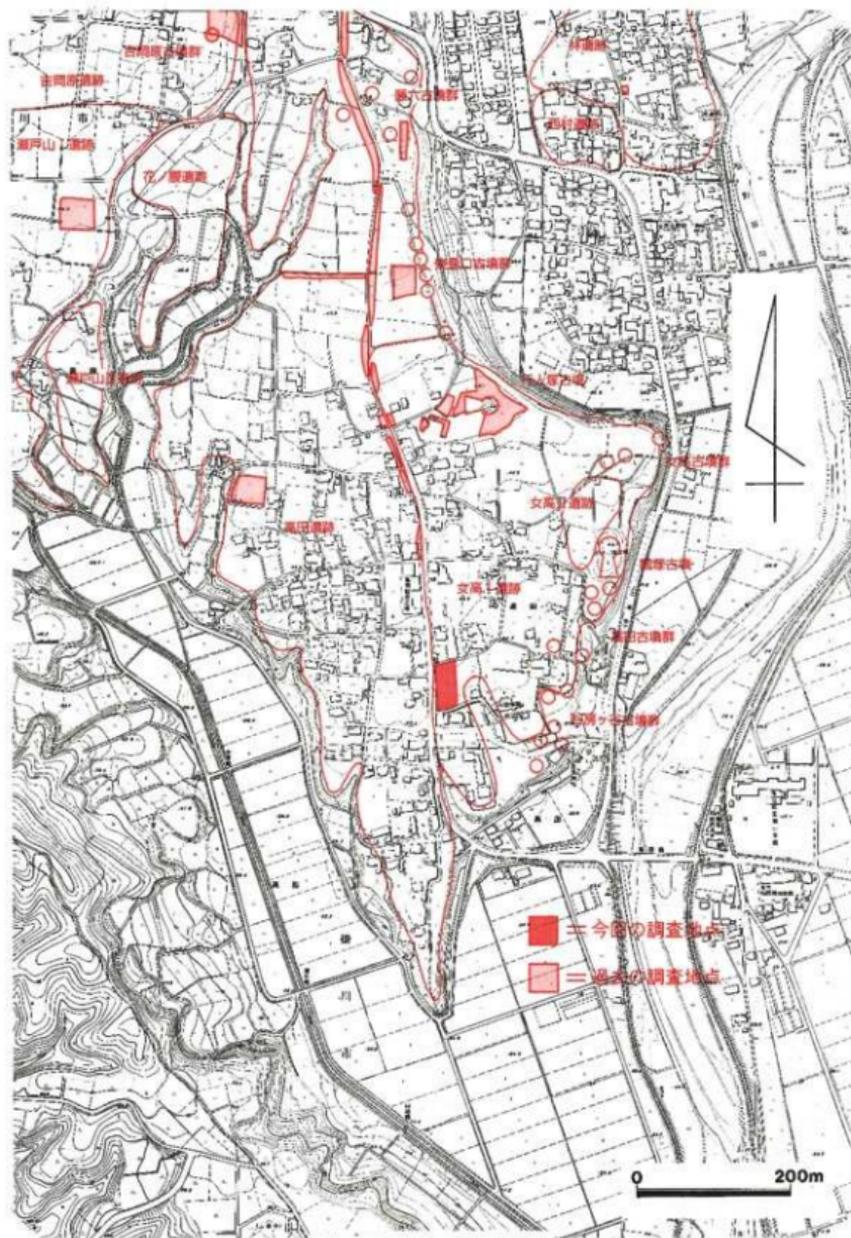
ここで女高I遺跡の過去の調査の成果を示しておく。女高I遺跡内では、昭和57年度、59年度、62年度、63年度、平成元年度の5次にわたり発掘調査が行われている。したがって、今回の調査は、6次にあたる。昭和62年度の調査以外は、行人塚古墳の周辺の茶樹改植に伴う発掘調査である。

昭和57年度の調査は、行人塚古墳の前方部の北側周辺（第1区）と後円部の南側（第4区）の一部が調査された。昭和57年当時、行人塚古墳は円墳だと考えられていたが、前方部および前方部周溝が検出され、前方後円墳であることが確認された。このほか、第1区からは弥生時代後期末と思われる竪穴住居跡10軒、時期不明の掘立柱建物1棟、土壌7基等が検出された。また、第4区からは弥生時代後期と考えられる竪穴住居跡7軒、時期不明の掘立柱建物1棟、土壌等が確認されている。

昭和59年度の調査は、行人塚古墳の前方部の西側に設定されたトレンチ2か所と後円部の東側（第3区）が調査された。トレンチからは柱穴、溝状遺構、竪穴住居跡3軒が、第3区からは竪穴住居跡13軒、掘立柱建物3棟、方形周溝墓1基、方形周溝墓状遺構、行人塚古墳周溝が検出された。この調査により女高I遺跡の存続時期が古墳時代初頭期にまで及ぶことが判明した。

昭和62年度の調査は、市道高田本通り線の拡幅に先立つもので、隣接する高田遺跡とあわせて調査された。両遺跡の調査の成果は、弥生時代後期から古墳時代中期の竪穴住居跡5軒、溝状遺構2条、土壌5基、小穴多数、古墳1基が検出された。遺物は、弥生時代から古墳時代中期の土器、縄文時代中期の土偶破片が出土している。

昭和63年度の調査は、行人塚古墳の前方部の西側が調査された。近世の溝を含めた溝状遺構4条、竪穴住居跡3軒、掘立柱建物1棟、柱穴多数、意味不明遺構を検出した。このうち弥生時代後期の住居跡は、1次調査時に検出された同時期の住居跡といくつかの共通点が見られた。また別の住居跡からは、S字状口縁甕が出土し、遺跡存続が古墳時代前期に及ぶことが追認された。



第2図 遺跡の周辺地形図

平成元年度の調査は、行人塚古墳の後円部の北側が調査された。竪穴住居跡4軒、溝状遺構2条、古墳時代中期と思われる古墳周溝2条、近世の土壌墓1基と道状遺構1条、小穴が検出された。古墳の周溝と思われる溝は、規模や形状から方形の古墳に伴う周溝と考えられ、推定される古墳の一辺の長さは18mを越えるものである。また、住居跡の平面形や出土した土器の年代から、行人塚古墳の東側域に弥生時代後期の住居跡が多く確認され、西側域に古墳時代前期の住居跡が多く検出されている。このことから、時代ごとの集落の移動が考えられる。

以上が、これまでに行われた調査成果である。検出された遺構数は、竪穴住居跡45軒、掘立柱建物6棟、土壌13基、溝状遺構9条、方形周溝墓、古墳等である。総面積は、約3,654㎡になる。竪穴住居跡と掘立柱建物の数だけを見ると、女高I遺跡に隣接する高田遺跡内で平成5年度に発掘調査を実施した時に検出された、竪穴住居跡43軒、掘立柱建物6棟とほぼ同数である。この時調査された面積は、約1,400㎡である。相対的にみると、女高I遺跡は今までに調査された高田遺跡に比べると、当該期の遺構の密集度も低いことから集落の中心部分ではないようである。

このように、のちの古墳時代中期に和田岡古墳群を造営する有力な首長を産み出す集落の原形を成すと推察される、弥生時代後期から古墳時代前期の和田岡原に所在する遺跡群は、部分的ではあるが、長年に渡り数多くの発掘調査を実施してきた。また、それによって得られた事象は、掛川市の歴史を考察する上で、重要な役割を果たしている。

- (参考文献) (1) 掛川市教育委員会 「行人塚遺跡発掘調査概報」 1983
(2) 掛川市教育委員会 「女高遺跡発掘調査概報」 1985
(3) 掛川市教育委員会 「昭和63年度出土文化財展」パンフレット 1988
(4) 掛川市教育委員会 「女高遺跡発掘調査報告書」 1989
(5) 掛川市教育委員会 「女高遺跡・行人塚古墳発掘調査報告書」 1990
(6) 掛川市教育委員会 「高田遺跡発掘調査概報」 1995

II 調査の内容

今回の調査では、竪穴住居跡（S B）11軒（内S B 05、11は炉の検出のみ）、掘立柱建物（S H）2棟、溝状遺構（S D）5条（内S D 03は攪乱と判明）、土壌（S F）7基、意味不明遺構（S X）15基、小穴（S P）多数を検出した。これらは、弥生時代後期初頭から古墳時代中期に属するものである。また、E・F・G-10区から11区にかけて検出された小穴には、柱穴状を示すものがあり、掘立柱建物がさらに存在していた可能性が考えられる。これらの得られたすべての資料を紹介するのは本書では困難なため、数軒の竪穴住居跡と掘立柱建物および溝状遺構についてのみ報告したい。

1. 遺 構

i 竪穴住居跡

SB01（第4図）

D・E-4区から5区において検出された。北側はS D 02に切られている。平面形は、楕円形を呈し、壁溝は確認されなかった。規模は、東西5.3m、南北は推定で4.5m程である。覆土は黒色土であるが、後世の耕作による攪乱が多く見られた。炉は住居跡のほぼ中央に1か所検出され、主柱穴は4本検出された。柱穴の深さは、床検出面から45cm程である。その他にも掘り方に関係されると思われるビットがいくつか検出された。床土は地山黄褐色粘土を含有した非常にかたくしまりのある土で、厚さが10～15cm程の貼床が形成されていた。出土土器は器形復元のできるものはないが、S D 02との新旧関係から弥生時代後期初頭頃の住居跡だと思われる。

SB03（第5図）

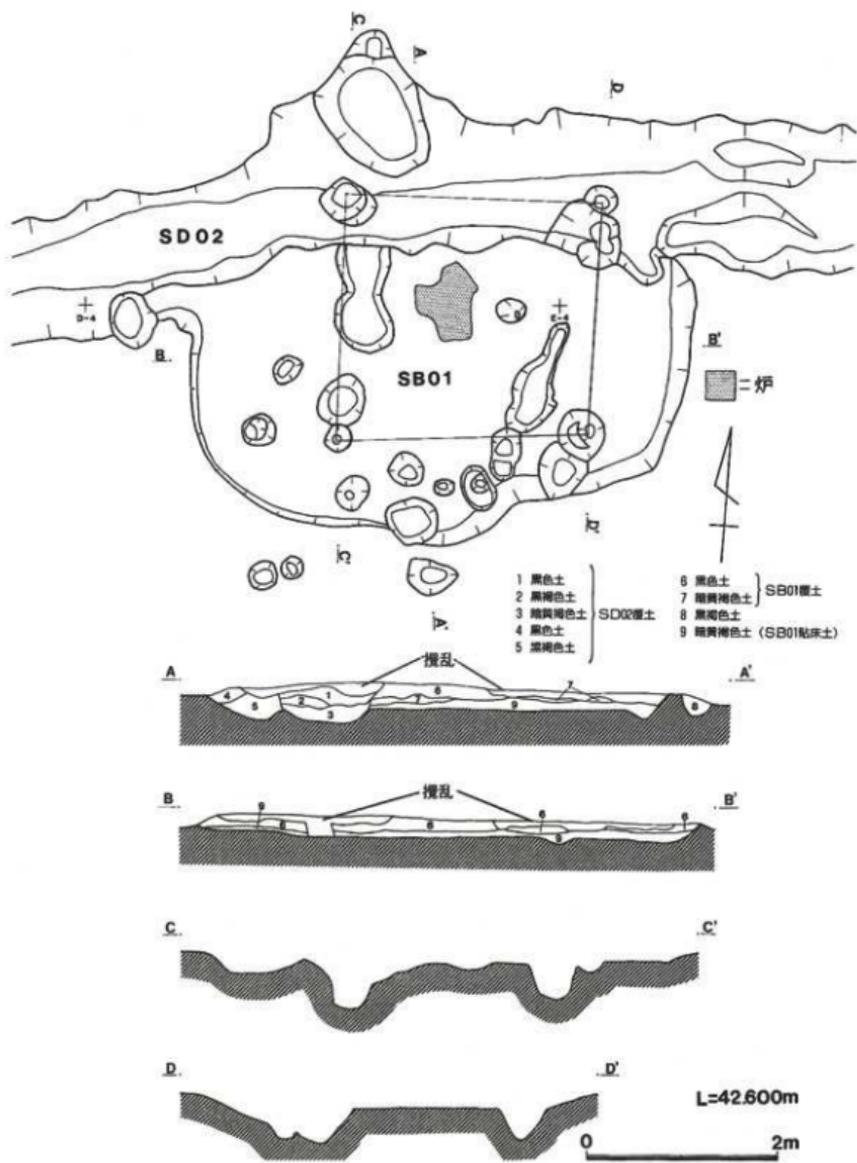
B・C-6区から7区において検出された。南西隅でS B 04を切っており、また、南東隅はS X 08によって切られている。平面形は方形で、東西4.8m、南北は推定で5.2m程を測る。壁溝はS X 08に切られている部分以外では検出されていることから、全周していたと思われる。炉と思われる焼土は、住居跡の中央よりやや北ないし北東寄りですべて3か所確認され、重複関係はみられなかった。主柱穴は4本検出され、深さは40cm程である。住居内の北東のS P 04、05からまとまって土器が出土した（第10図1～7）。これらの土器から、古墳時代中期中葉から後葉頃の住居跡と考えられる。



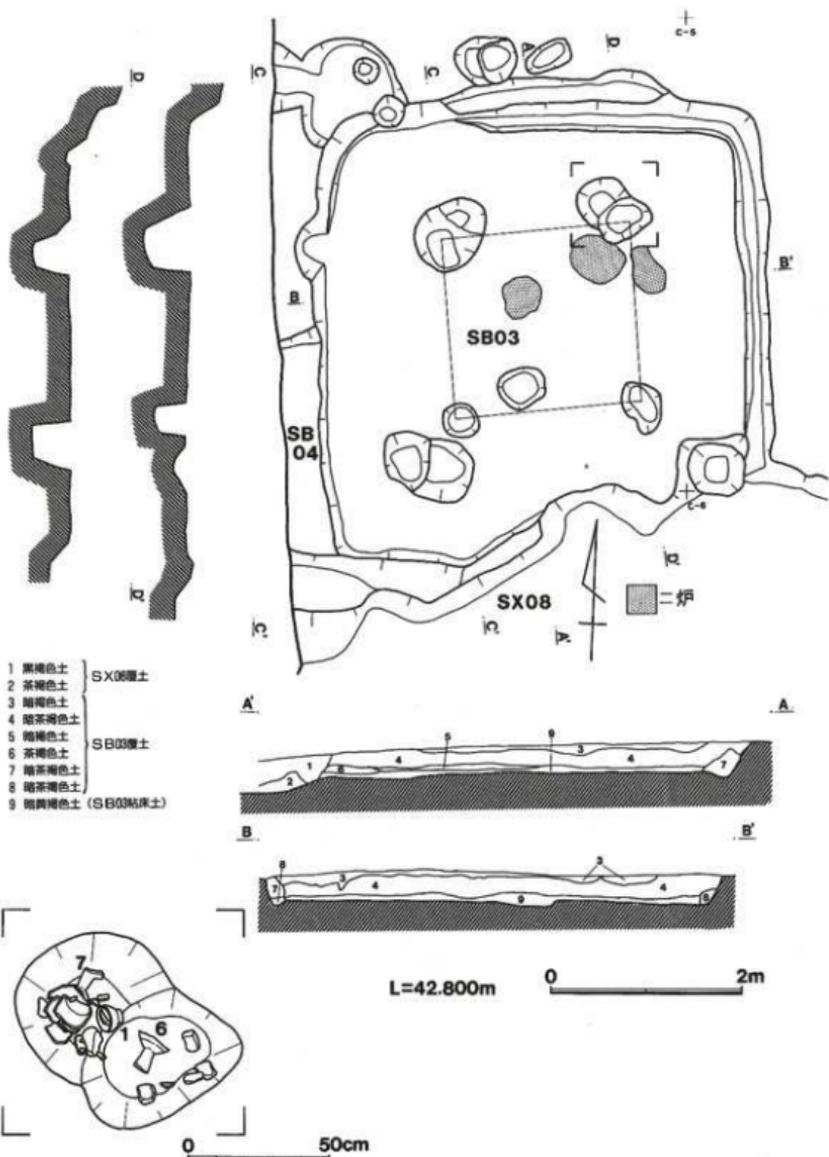
■ 攪乱

0 10m

第3圖 遺構全体図



第4图 SB01实测图



第5图 SB03实测图

ii 掘立柱建物

SH01 (第6図)

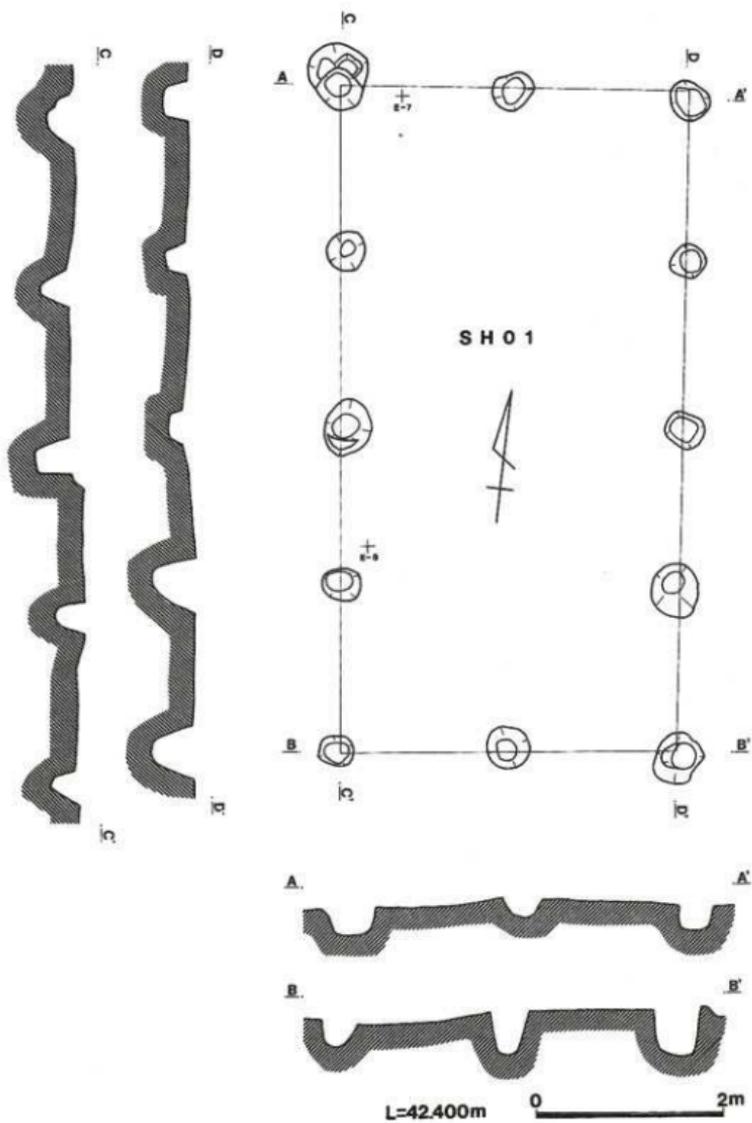
D・E-6区から9区にかけて遺構全体が検出された。東西2間、南北4間である。規模は、4.7m×8.4mで、南北方向に長い建物である。柱穴の掘り方は、40～75cm程度の円形で、深さは確認面から50cmを測る。各柱穴間の長さは、概ね1.8m前後である。出土遺物は、一つの柱穴から小片が出土したのみで、年代は明確ではない。なお、B-12・13・14区にかけて検出されたSH02は南北4間で、SH01と同規模の掘立柱建物と推定される。しかし、柱穴からの出土遺物は全くなく、年代は不明である。

E・F・G-10区から11区にかけて検出した小穴は、形状や断面の上層観察から掘立柱建物の柱穴ではないかと思われるものがある。以下の表に同一軸線上に並ぶピットをグルーピングしてみた。

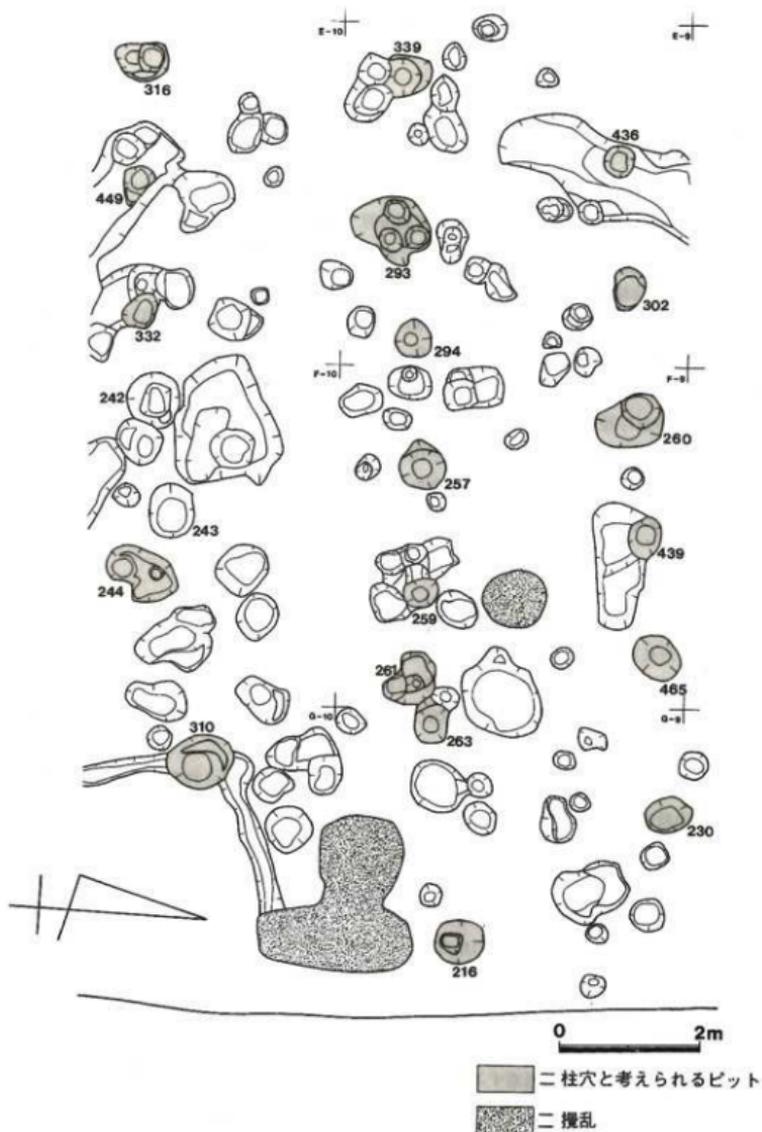
	ピットNo	グリット名	長径	短径	深さ		ピットNo	グリット名	長径	短径	深さ
グ ル 1 ブ 1	436	E-10	0.48	0.42	0.42	グ ル 1 ブ 2	261	F-10	0.84	0.79	0.35
	302	E-10	0.61	0.43	0.50		263	G-10	0.89	0.55	0.46
	266	E-10	0.97	0.75	0.71		216	G-10	0.72	0.66	0.69
	439	F-10	0.65	0.48	0.60	グ ル 1 ブ 3	316	E-11	0.76	0.55	0.55
	265	F-10	0.74	0.58	0.62		449	E-11	0.61	0.59	0.50
	230	G-10	0.65	0.52	0.29		332	E-11	0.56	0.44	0.44
	339	E-10	0.65	0.56	0.33		242	E-11	0.84	0.77	0.60
グ ル 1 ブ 2	293	E-10	1.20	1.04	0.43	243	F-11	0.76	0.64	0.56	
	294	F-10	0.55	0.52	0.57	244	F-11	1.09	0.52	0.49	
	257	F-10	0.75	0.65	0.62	310	F-11	0.95	0.76	0.87	
	259	F-10	0.61	0.46	0.46						

(単位：m)

第1表 柱穴と思われるピット一覧表



第6图 SH01实测图



第7図 E・F・G-10・11区ビット実測図

iii 溝状遺構

SD02 (第8図)

B・C・D-4・5区、E・F・G-4区にかけて検出された。調査区を東西方向に横断しており、その両端はさらに調査区外へと続く。西端のB-5区からやや北寄りにほぼ直線に伸び、D-4区のS B01のあたりで若干南側に屈曲する。東端はS B02を切っている。検出した長さは27.5m、幅は1.2~1.7m、深さは確認面から35cm程で、最深部で50cmを測る。しかし、調査区の東端と西端での確認面からの深さは、36.7cm、32.9cmとそれ程差がない。溝の掘り方は、S B01よりも東側では急峻な立ち上がりを呈するが、西側は比較的緩やかである。覆土は、上層が土器・小礫を含む黒色土、下層が土器・小礫を含む黒褐色土で構成される。遺構のほぼ全域にわたり土器・小礫が検出されたが、特に西端付近のB-5区での検出が顕著であった。土器は破片状のものも含めるとかなりの個体数にのぼり、これらの土器はいずれも廃棄されたような状態で出土している。その中から器形復元したものを、第10図11~第13図41に図示した。個々の器形の特徴より、弥生時代後期初頭に比定され、SD02の年代もその頃と考えられる。出土土器の器種は、壺・高坏・鉢がみられる。しかし、壺は認められないことから、器種構成には偏向性がみられ、SD02の性格を示唆するものと考えられる。

SD01 (第9図)

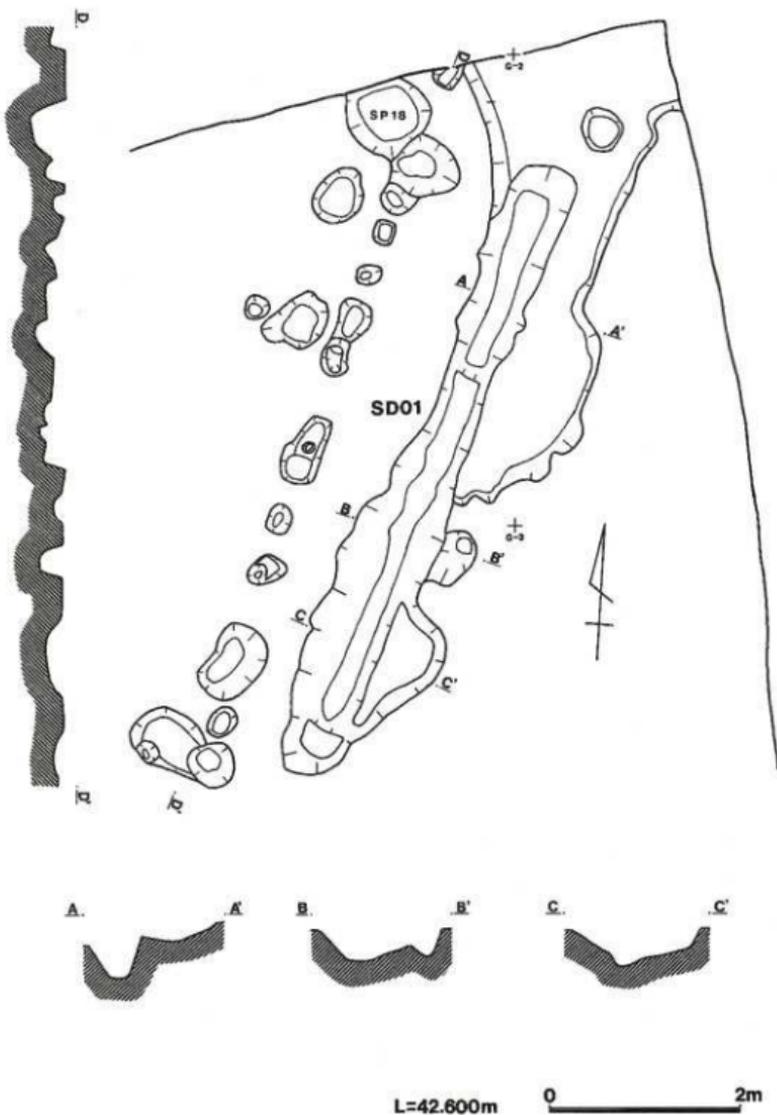
F・G-3区から4区にかけて検出された。北端は調査区外へと続き、南端はSD02と近接する。検出した長さは8.8m、最大幅は1.6mを測る。F-3区からG-3区にかけて一段深くなっており、そこでの確認面から溝底までの深さは55cmを測る。溝底の状態は、図示していないがかなりの凹凸がある。溝の断面形は逆台形状で、西側では急峻に立ち上がり、東側はそれよりもやや緩やかに立ち上がる。

SD01の西側にそれとほぼ平行するような形で、ピット列が検出された。ピット列の中心線とSD01の中軸線との距離は約1.3mである。ピットの大きさは、直径40~80cm程で、ピット間の距離は、最大45cmを測るが、概ね20cm前後である。出土遺物は、ピット列のいちばん北端のSP18から第9図9に図示した小型埴が出土した。また、ピット列からは外れるが、SD01の東側のSP20からも第9図10に図示した小型埴が出土している。出土状態は、SP18出土の埴はすでに破片状になっていたが、SP20出土の埴は、口縁部側をピットの底の方に向け、底よりも確認面に近い深さの位置の壁面に沿う形でほぼ完形で検出された。出土遺物からもSD01、ピット列の同時性が指摘できる。

遺構の性格については、SD01の形状より「布堀り」状遺構と考えられ、さらにピット列がSD01と平行する位置関係を勘案するならば、ピット列はSD01に付随する遺構と解釈できよう。しかし、調査区コーナー部での検出のため全体像が不明であることから、遺構の具体相についての速断はさけない。



第8图 SD02实测图



第9図 SD01・ビット列実測図

2. 遺物

今回の調査で出土した遺物は、ほとんどが土器である。出土遺物の総量はポリコンテナ(545³×336×200)25杯程で、調査面積からみてもそれほど多いとは言えない。その大半が、S D02からの出土で、南調査区(10ラインから南側)からはほとんど出土していない。現在、整理作業中であり、また紙面の都合上すべての遺物を紹介することは困難なため、器形復元ができるものを中心に掲載した。

1～7はS B03からの出土土器で、古墳時代中期中葉から後葉の土師器である。

1は台付甕の口縁～胴上半部である。内外面とも口縁部から頸部にかけて横ナデがみられる。胴部は外面は斜位ハケが、内面は横・斜位ハケが施される。

2と3は台付甕の脚台部である。内外面ともハケが施されている。3の外面のハケはかすかに残る。1と2は同位置の出土で、胎土・焼成の共通性から、恐らく同一個体であろう。

4と5は出土位置は異なるが恐らく同一個体になると思われる高坏の坏部と脚部である。4の坏部は口縁部を欠損している。外面にはわずかにミガキが、内面にはナデの痕が残る。5の脚部は裾部を欠損する。明瞭には残っていないが縦位のミガキが施される。

6と7は高坏で、口縁部と裾部を欠損する。6は坏部に稜が入り、脚部に縦位ハケが若干みえる。7は坏部に横方向、脚部に縦方向のミガキが施される。裾部はハケの後ナデが施される。

8はS D01から出土した台付甕の脚台部である。器面状態が悪いが、脚部には縦・斜位ハケが認められた。

9はS P18から出土した小型の埴である。頸部はくの字に屈曲する。内外面とも口縁～頸部にかけてナデが施され、胴部は縦ハケ後ナデ消されている。

10はS P20から出土した小型の埴である。頸部の屈曲は9よりも弱く、胴部は微頭型を呈し、底部は凹んでいる。全体的に雑なつくりである。外面には黒斑がみられる。

11～41はS D02からの出土土器である。

11～14はほぼ完形の壺型土器である。

11は器高36.2cmを測る。口縁部～頸部にかけてハケを施し、肩部に直線文を巡らす。胴上半部には斜位ハケを施し、一部縦方向に波状文を施す。胴下半部～底部はミガキを施す。底面は上底状を呈する。

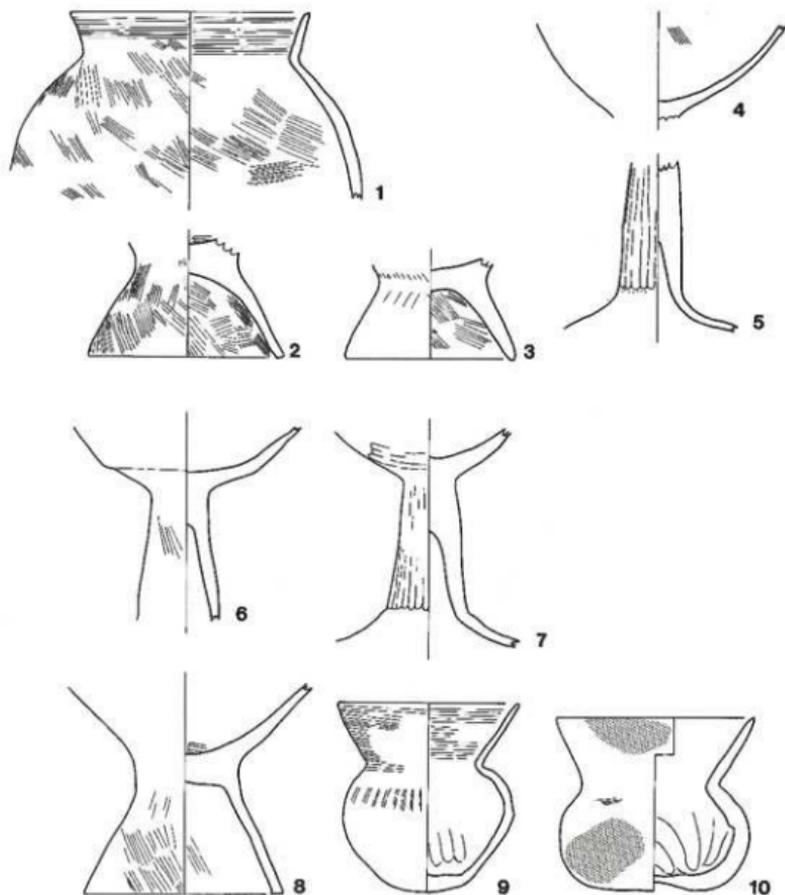
12は口縁部を欠損する。頸部は縦・横ミガキが施され、肩部に5条の直線文を巡らす。胴上半部には羽状の斜位ハケを施し、胴下半部にはミガキを施す。

13も口縁部を欠損する。器面状態が悪いが、頸部に縦位ミガキを施し、肩部には3段の櫛刺突直線文を巡らす。

14は口縁部および胴下半部～底部を欠損する。内外面とも磨滅し、調整は不詳である。

15～17は折り返し口縁を成す壺型土器の口縁部である。

15は口唇部の担面に棒状浮文を2個1組(単位は不明)を付し、頸部にハケを施す。肩部は縦



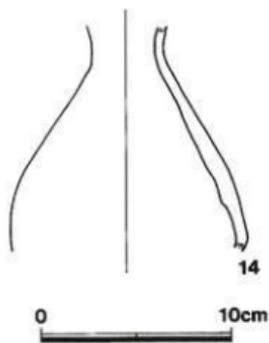
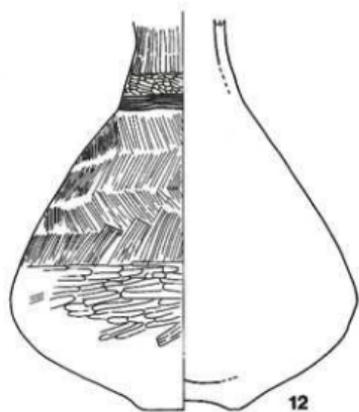
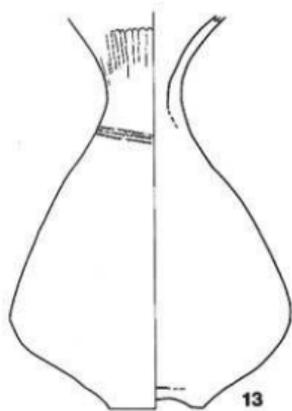
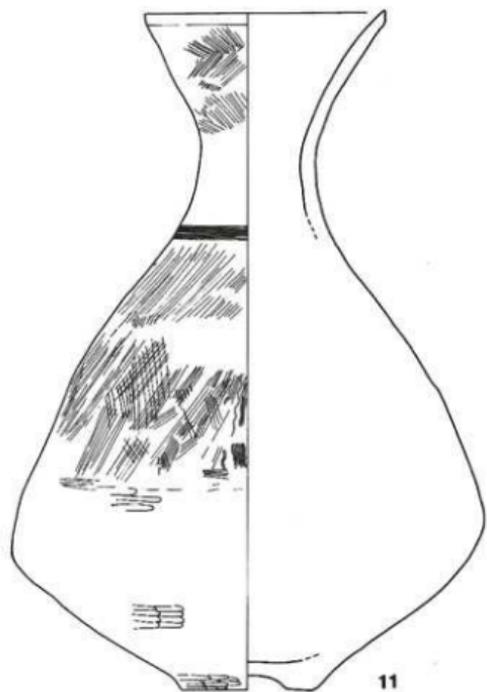
第10図 出土土器実測図(1)

0 10cm

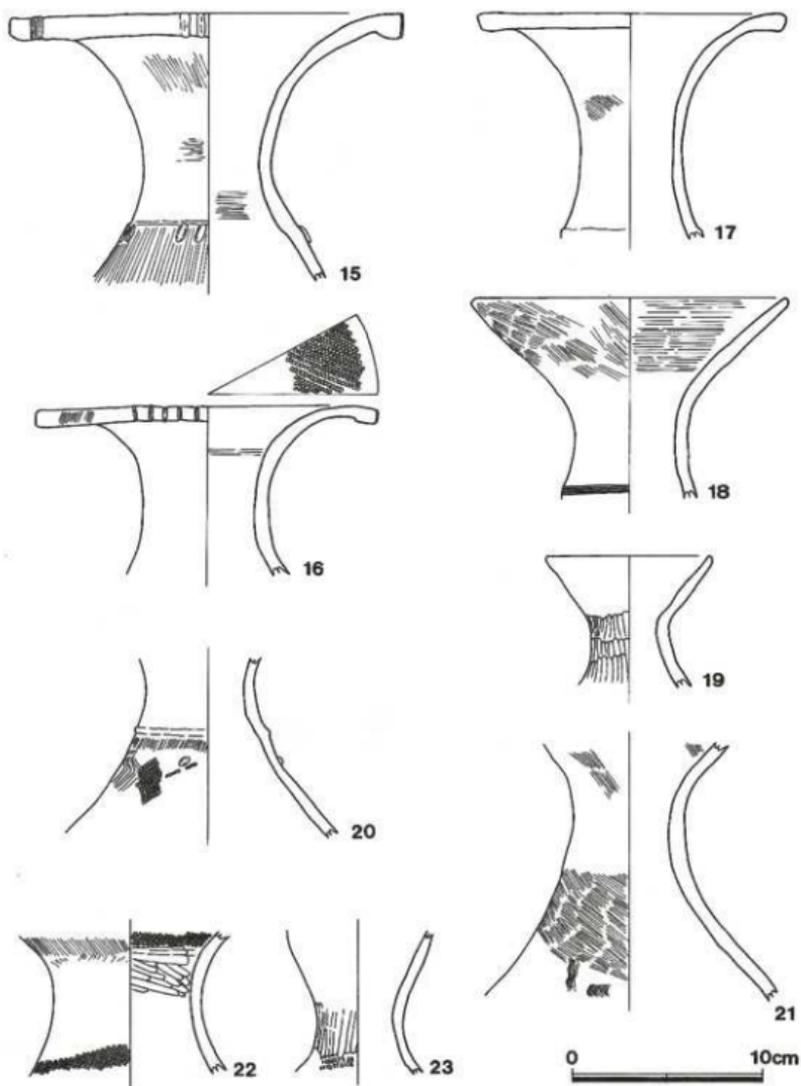
ハケ調整後、冂形浮文を2個1組(単位は不明)貼り付けている。

16は口唇部の坦面にハケ調整後、棒状浮文を5個1組(単位は不明)を付す。口縁部内面に縄文を施す。

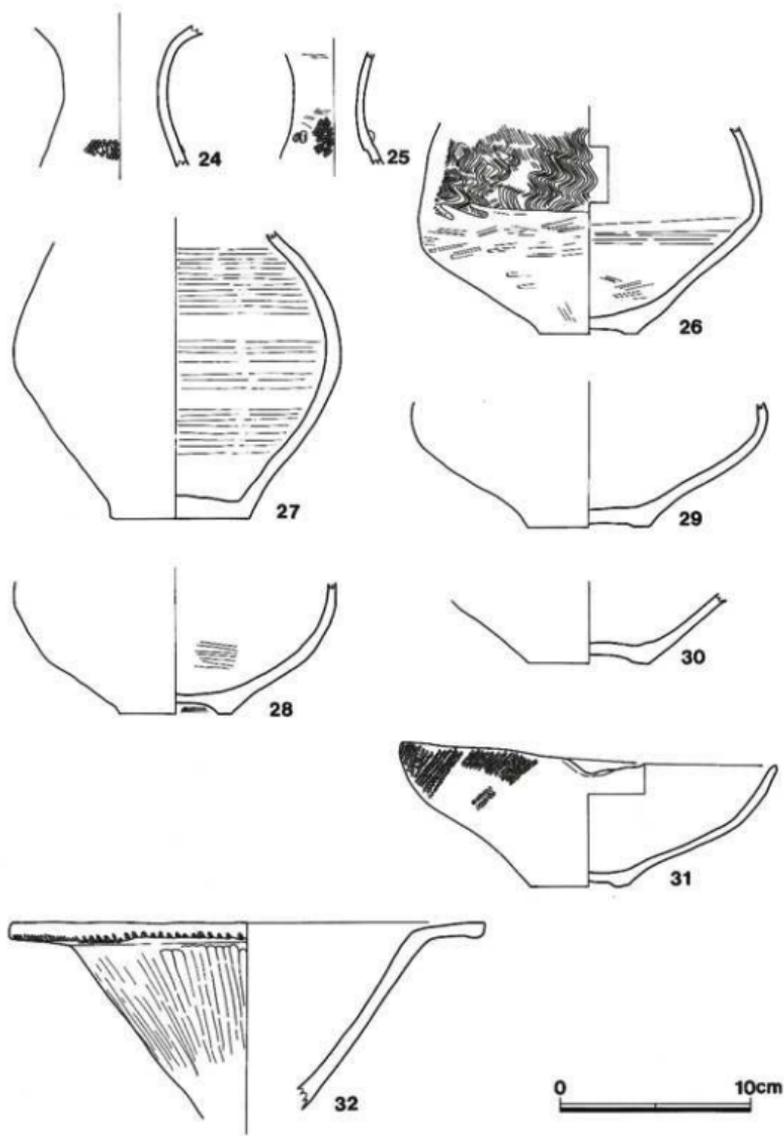
17は頸部の一部に若干ハケがみえる。16・17に比べ頸部が細長く、肩部に突帯状の張り出しが確認できる。



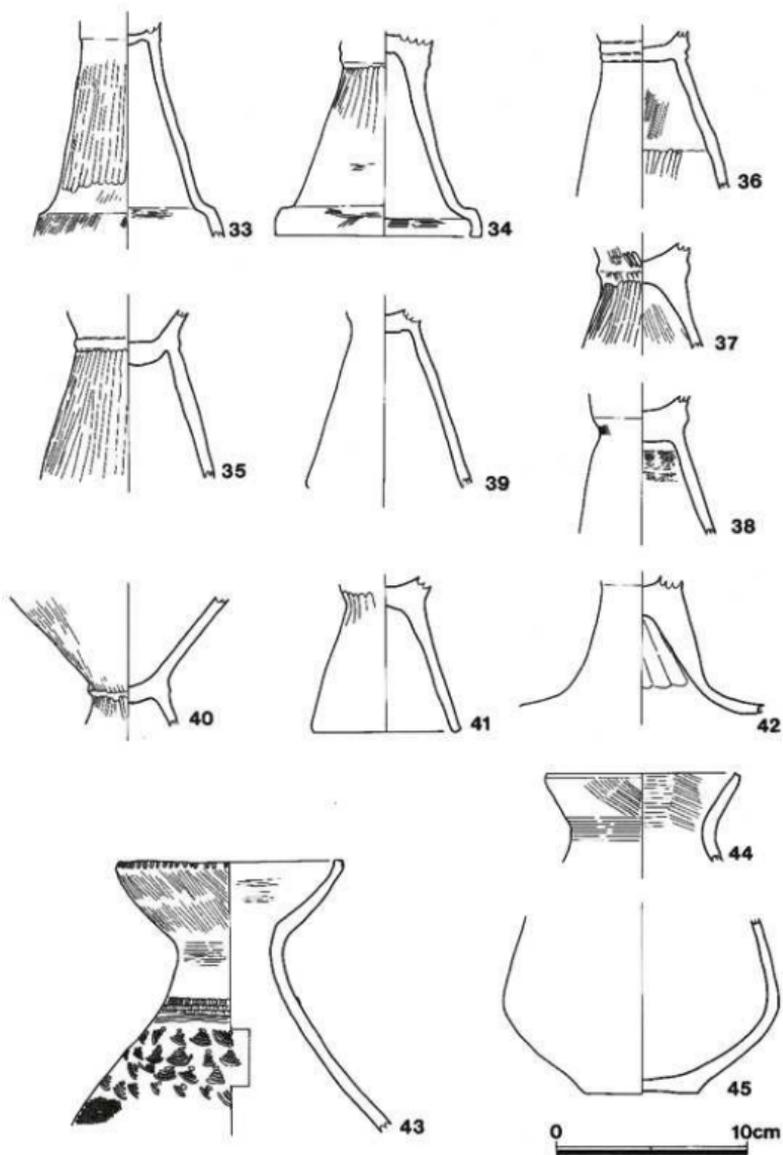
第11图 出土土器实测图(2)



第12图 出土土器実測图(3)



第13图 出土土器实测图(4)



第14图 出土土器实测图(5)

18～19は単純口縁を成す壺型土器の口縁部である。

18は外湾気味に立ち上がり、口縁部外面には斜位ハケ、内面はナデを施している。頸部に直線文を巡らす。19は頸部をくの字に屈曲させる。頸部外面には縦ミガキを施す。口縁部内面にはナデが認められる。

20～25は壺型土器の頸部である。

20は肩部に断面三角形の小さな張り出しを有し、その下に縦ハケを施す。さらに櫛播波状文を施した後、縄文が施される。また、円形浮文が貼り付けられている。

21は口縁部および肩部外面に斜位ハケを施す。胴上半部には縦方向の波状文が認められる。内面にも一部ハケが施されている。

22は口縁部外面にハケを施す。頸部にはミガキを施すが明瞭には残っていない。肩部には縄文を施す。内面にも縄文とミガキを施す。広口壺の頸部であろう。

23は肩部に刺突文を施すが、頸部の縦ミガキにより、一部消される。頸部の屈曲が弱い。

24は肩部に縄文を施した後、その上から2個1組（単位は不明）の円形浮文を張り付けている。頸部から口縁部にかけて外湾する。

25も24と同様に肩部に縄文を施した後、円形浮文を2個1組（単位は不明）を付す。小型の細頸タイプであろう。

26～30は壺型土器の胴部～底部である。

26は胴上半部に縦方向の櫛播波状文を雑に施文する。胴下半部から底部にかけてはミガキを施す。内面にはハケを施す。底部は上底状を呈する。色調は内外面とも黒褐色である。

27は外面の調整ははっきり残っていないが、内面にはハケが確認できる。胴部の中央部に最大径を有し、底部は平底状を呈する。

28も外面の調整は不詳であるが、内面に若干ハケが残る。胴部最大径から垂直気味に立ち上がる。

29と30は内外面とも調整は不詳である。いずれも上底状を呈する。29は胴下半部に最大径を有するタイプで、30はわずかな破片だが、恐らく同様であろう。

31は注口を有する鉢型土器である。上底状の底部より内湾気味に開くが、若干いびつな形状を呈する。外面上半部に縄文を施す。

32～38は高坏である。

32は坏部片で、脚部は出土時においても欠損していた。口縁端部は折り返し口縁で、明瞭な刻目が施される。器面には縦方向のミガキを丁寧に施す。

33～38は脚部片である。

33は裾端部を欠損する。外面に縦ミガキを施すが、明瞭には残っていない。裾部外面には斜位ハケを、内面には横ハケを施す。

34は接合部に突帯を付す。外面に縦位ミガキを施す。裾部外面には横・斜位のハケを施し、内面には横ハケを施す。

35～38は接合部に突帯を付し、そこに36には沈線が、37にはミガキ前のハケ（羽状？）の調整痕が認められる。38は一部縦ハケが残る。外面には縦位ミガキを施し、内面に縦位のミガキやハケ、横ナデを施す。

39～41は台付甕の脚台部である。

39は内外面とも摩滅していて、調整方法は不詳である。40は外面に縦ミガキを施す。接合部には突帯状の張り出しを有する。41は接合部に一部縦位ミガキが確認できる。

42はS P 59から出土した高坏の脚部である。坏部は出土時において欠損していた。裾部は大きく外湾する。内面に指頭による調整痕が残る。古墳時代中期の土師器である。

43～45はS D 04からの出土土器である。

43は壺型土器の口縁部～胴上半部である。単純口縁を成し、口縁端部を面取りする。口唇部には刻目を施すが明瞭には残っていない。口縁部外面には縦・斜位ハケを施し、頸部は横ナデを施す。肩部に櫛刺突直線文を2段と櫛描波状文を施した後、2箇所に9単位の断面三角形の小さな浮文を貼りつけている。胴上半部には4段の櫛描扇形文を施す。そこから胴中央部にかけては縄文が施される。なお、接合不能の胴部片から、胴中央部の縄文の直下に櫛描波状文が施される。

44は壺型土器の口縁部～頸部である。口唇部は面取りする。口縁部の内外面ともに斜位・縦ハケが施される。頸部には横ナデが施される。

45は壺型土器の胴部～底部である。平底状を呈する。色調は暗黄褐色であるが、胴部最大径から底部にかけては赤く変色している部分がある。

以上が今回紹介した土器群である。このうちの大半を占めるS D 02出土の土器は、前述したように弥生時代後期初頭の土器の特徴を示している。この時期の土器がこれほど多くまとまって出土したことは女高I遺跡内においてはなく、当該時期の土器編年を考える上では、重要な資料を得たと言える。紹介できなかった資料の整理を含めて、検討していきたい。

Ⅲ ま と め

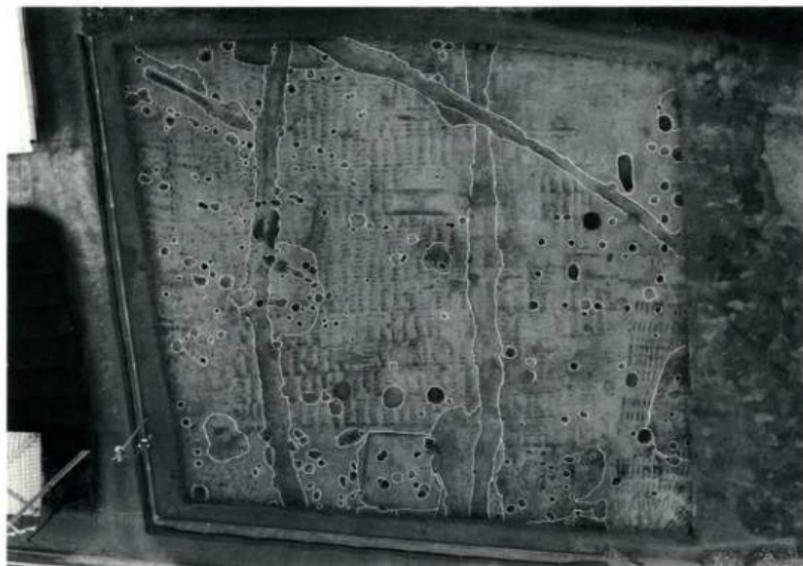
今回の調査地点は、今まで女高Ⅰ遺跡の調査の中心地であった行人塚古墳周辺から、南西に350m程離れており、また、和田岡原全域の発掘調査の実施状況からみると、段丘南傾縁辺部周辺では調査が行われておらず、まさしく空白域であった。そこでまとめとして、今までの調査成果と比較していくつかの問題点をあげてみたい。

1. 今回の調査では、和田岡原の遺跡の年代の中心であった弥生時代後期～古墳時代前期の遺構の検出が少なかった。そのかわり、その前後にあたる弥生時代後期初頭及び古墳時代中期中葉から後葉の遺構がそれぞれ検出された。広大な和田岡原に各時期にわたり集落が営まれていたことが想像でき、集落間の移動や占地の違いが考えられる。
2. 古墳痕、古墳の周溝、方形周溝墓の検出はなかった。これは、段丘縁辺部に古墳等が築造されるという考え方を追認したと言えよう。
3. 掘立柱建物が数棟検出された。中でも柱穴全体が検出されたSH01は、これまでで最大規模のものである。時期の決定ができないのが残念ではあるが、同規模と推定されるSH02やグルーピングされるピットの存在を、竪穴住居跡との位置関係を含めて集落の復元をする必要がある。
4. 出土物は、SD02出土の弥生時代後期初頭の土器が特筆される。弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落跡が中心であった和田岡原に所在する遺跡群で、弥生時代後期初頭と考えられる土器がこれほど多く出土したことはない。爆発的に数が増える弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落以前にも、それらに先駆ける集落を営んでいた人々の存在が裏付けられる。これらの土器群は、従来いわれている菊川式の前段階に対応すると考えられる。この時期の土器の出土例として、御殿・二之宮遺跡（静岡県磐田市）、堀越ジョウヤマ遺跡（静岡県袋井市）、鶴松遺跡（同）などがあげられる。

また、SB03出土の古墳時代中期中葉から後葉と考えられる土師器も、和田岡原の遺跡からは出土例がない。これと同時期の和田岡古墳群を造営した人々の住居跡である可能性も否定できない。この時期の土器の出土例として、坂尻遺跡（静岡県袋井市）、宮之腰遺跡（静岡県焼津市）、道場田・小川城遺跡（同）などがあげられる。

以上、今回の調査の成果は、これまでの女高Ⅰ遺跡の調査の中でいちばんバラエティに富むものであったと言える。それ故に、多くの問題点が残された。しかし、それは、今後の調査を含めて解決していかなければならない課題である。

圖 版



北調査区完掘状況



南調査区完掘状況



重機稼働風景



S B01 完掘状況 (北から)



S B 03 完掘状況 (南から)



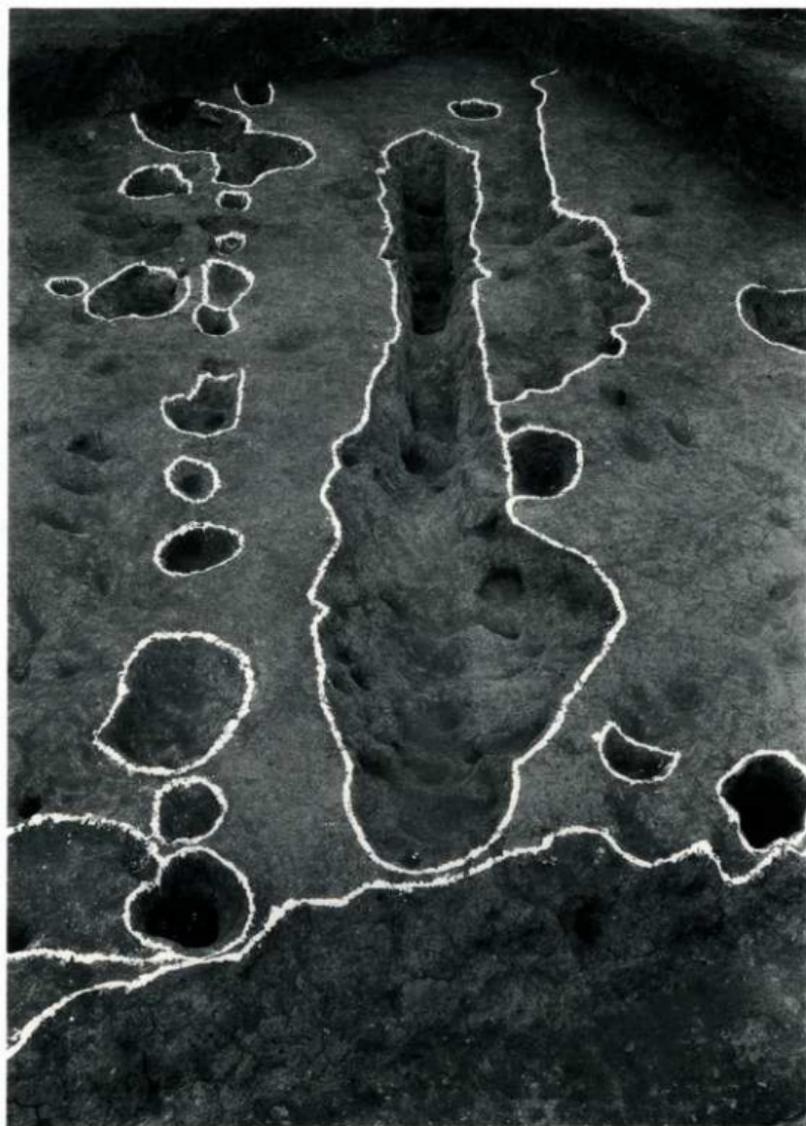
S B 03内 S P 04,05 遺物出土状況 (北から)



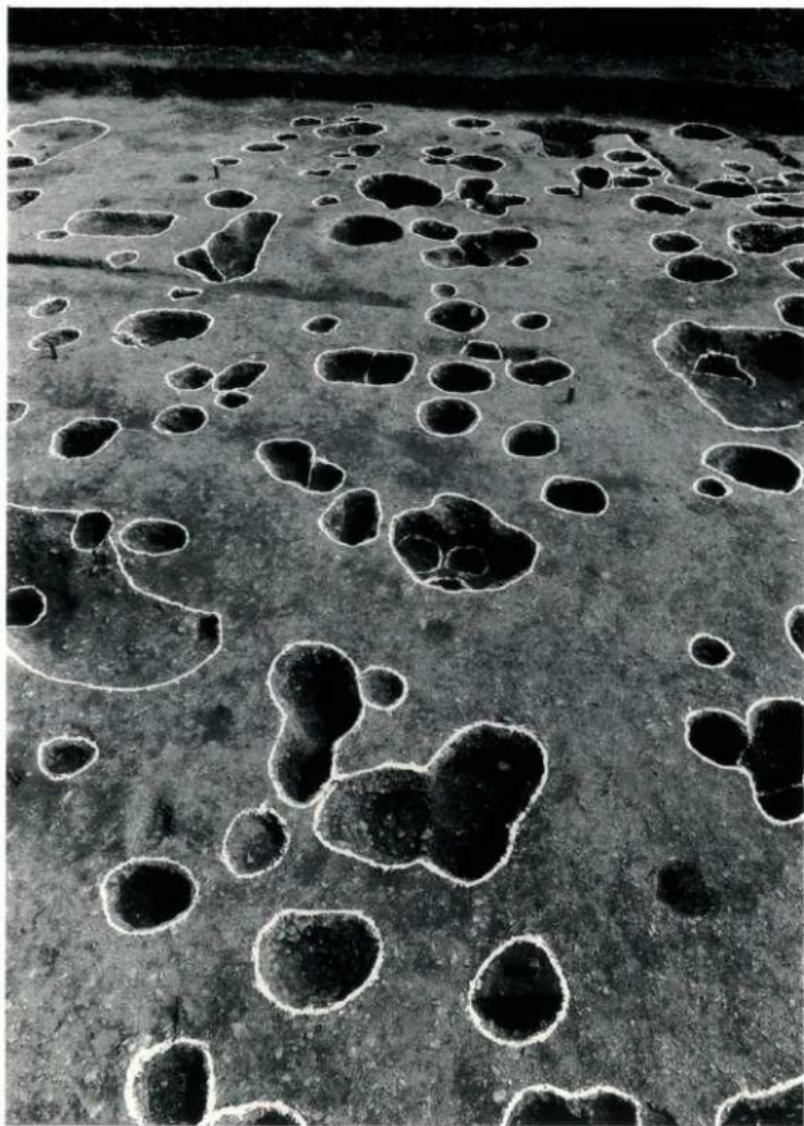
S H01 完掘状況 (南から)



S P20 土器出土状況 (南から)



S D01 ビット列完掘状況 (南西から)



E・F・G-10・11区ビット完掘状況（西から）



S D 02 遺物出土状況 (西から)



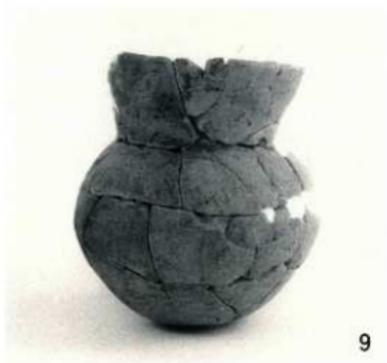
S D 02 完掘状況 (西から)



SD02 遺物出土状況（北から）



SD02 遺物出土状況（東から）

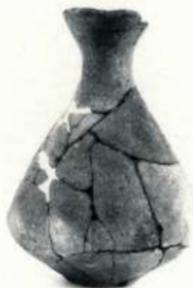




11



12



13



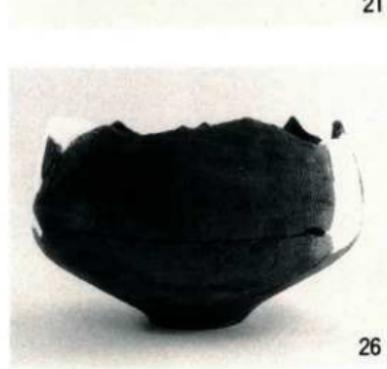
14

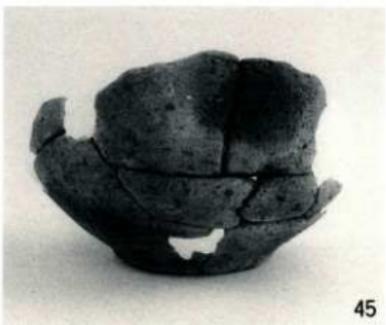


16



15





報 告 書 抄 録

ふりがな	めだかいちいせき							
書 名	女高Ⅰ遺跡							
副 書 名	発掘調査概報							
編 著 者 名	村 松 弘 規							
編 集 機 関	掛川市教育委員会							
所 在 地	〒436 静岡県掛川市御所原9番24号 TEL (0537) 24-7773							
発行年月日	西暦 1996年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北 緯 * * *	東 経 * * *	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
めだかいちいせき 女高Ⅰ遺跡	しずおかけんかかわし 静岡県掛川市 たかだまざとうろく 高田字藤六	22213	244	34度 46分 57秒	137度 57分 13秒	19950710 ~ 19951023	1,400㎡	茶 畑 改 植
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
女高Ⅰ遺跡	集落跡	弥生時代 後期~ 古墳時代 中期	竪穴住居跡 11軒	掘立柱建物 2棟	溝状遺構 4条	弥生時代後期初頭~ 古墳時代中期中葉か ら後葉の上器	弥生時代後期初頭 の土器群 布堀状の溝状遺構	

女 高 I 遺 跡

発掘調査概報

1996年3月31日

編集発行 掛川市教育委員会
掛川市御所原9番24号
TEL (0537)24-7773

印刷 株式会社 彩 光 堂
掛川市宮脇248番地1
TEL (0537)24-0013

